Diana L. Eck, *A New Religious America: How a "Christian Country" Has Become the World's Most Religiously Diverse Nation*

Harper SanFransisco, 2001, 404pp, $27.00 (pbk $17.95)

佐藤　清子

本書は，ハーバード大学が1991年から行なった多元主義プロジェクト（Pluralism Project）の成果として，プロジェクトの代表者であるダイアナ・L・エックにより上梓されたものである。著者エックは，ハーバード大学の比較宗教学，インド学の教授である。

今日，多元主義（pluralism），多文化主義（multiculturalism），エスニシティ（ethnicity），といった語彙はアメリカ合衆国を考える際には欠かすことのできない要素となっている。それまでは「アメリカ」の中に解消されてしまうことが望ましいとされてきた移民としての行動様式や自己意識の保持が逆に積極的に評価されるという状況が生まれつつあるのだ。建国以来現在も根強く存在する「同化論」（アングロ・サクソン文化に移民文化が同化する），18世紀末に登場した「坩堝論（melting pot）」（様々な文化がアメリカ合衆国において融け合い，新たなアメリカ文化を生み出す）とは違う新たな理念として登場した多文化主義は，近年最も注目を集めるトピックとなっている。

多文化主義は，1960年代の公民権運動後に活発になった様々な議論を経て用意されたものであるが，議論の一方で，合衆国には大量の新たな移民や難民が流れ込んでいた。そしてその直接的な原因となったのは1965年の移民法改正である。1920年代以来，合衆国の移民制限は国別割り当て制によって行なわれており，実質的にヨーロッパ地域外，特にアジアからの移民を排除していた。しかし公民権運動の成果として達成された1965年の改正は，人種，性別，国籍，出身地，居住地などによる移民の入国差別を禁止し，国別割り当てを基本的に廃止したため，アジアなどの非ヨーロッパ地域から移民が数多く渡りはじめた。そしてその結果として，この改正は合衆国全体における移民の出身地域の構成を大きく変えることになったのである。

加えて，国家間移動を支える移動・輸送手段や，Eメール，衛星放送，インターネットといった情報技術が近年格段の発達を遂げたことも，新たな状況を生み出す一助となっている。エックも指摘していることであるが，現在の移民はかつてよりもはるかに容易に故国と行き来が可能である上に，故国の情報をタイムラグなしに得ることができるようになった。新たなテクノロジーが，移民と故国との紐帯を今まで以上に太く強いものに保つことを可能にしている。

以上のような変化は，移民国家アメリカ合衆国にこれまでよりさらに幅の広い宗教の多様性をもたらした。この国では植民地時代において既に，新たな地域からの移民は新たな宗教伝統の到来を意味していた。そして今度は1965年の法改正を大きな契機として，ヒンズー教やシク教，ジャイナ教人口がインドから，イスラム教人口がアフリカや中東やパキスタン，インドネシアか

ら，仏教人口が東南アジア，中国から，というように，様々な「アジアの」宗教が渡来することになったのである。（人数が多く，それゆえ様々な移民問題の当事者としてしばしば取り上げられたヒスパニックは，その多くがカトリックであった。本書では彼らよりもむしろ，これまで合衆国にとってなじみの薄かった「アジアの」宗教をもたらした移民に焦点を当てている。）

こうして合衆国においては，1950年代までによく語られるようになった「ユダヤ・キリスト教のアメリカ」のみでは，その宗教状況は語りつくせないという認識がしだいに強まりつつある。これは日常生活レベルでいえば，ユダヤ・キリスト教以外の宗教をもった人物と接触する機会がこれまでになかったほど増加しているということだ。エック自身のエピソードを紹介しよう。彼女の比較宗教学の授業において，1970年代には例えばヒンズー教徒の学生は一人もおらず，ヒンズー教は遠いインドの宗教として紹介された。それが現在では彼女のクラスには自身がヒンズー教徒である移民二世の学生が出席している。エックによれば，合衆国政府などの公的機関は多文化主義が主張されるに伴い，移民の多様性が増加していることには注目しているが，それが宗教の多様性をもたらすこと対しての関心は非常に薄いという。エックはまず，学生との共同調査でボストンの宗教的多様性が想像以上のものだったことを知った。そして，その後に行われたハーバード大学の多元主義プロジェクトは，こうした背景の下に着手され，学生を使って全米各地の宗教多元状況の調査を行ったのである。

以上，本書の元となった多元主義プロジェクトの背景を踏まえた上で，その構成を紹介する。

ONE　Introduction to a New America
TWO　From Many, One
THREE　American Hindus: The Ganges and the Mississippi
FOUR　American Buddhists: Enlightenment and Encounter
FIVE　American Muslims: Cousins and Strangers
SIX　Afraid of Ourselves
SEVEN　Bridge Building: A New Multireligious America

第一章は全体の導入として，現在のアメリカ合衆国の宗教的状況の変化を事例とともに包括的に紹介している。第二章は合衆国における移民の多様性に伴う宗教的多様性の増大と合衆国の統合の問題を歴史的に追った部分が中心である。これらは本書の序の部分として，その後に来る三つの具体的な事例紹介を導くものである。第三章，四章，五章では，それぞれヒンズー教，仏教，イスラム教について，合衆国における歴史と，現在の様々な活動がやはり豊富な例を基にして記述している。以上をうけて，第六章は彼ら「新たな」宗教伝統の存在感を増大させることに伴う軋轢や問題を，第七章では，「新たな」宗教伝統が「古い」宗教伝統といかに共存していくことができるかということを紹介している。

本書全体を通じて見出されるのは，エックが引き出してくる事例の多彩さとその圧倒的な量の豊富さである。合衆国本土において宗教的に最も多様な州とされているカリフォルニア州，もしくは昔から移民を多く集めてきたニューヨーク，ボストン，シカゴといった合衆国屈指の大都市のみならず，その例は全米の中小都市にまで及んでいる。オハイオ州トリードのモスク，テネシー州ナッシュビル郊外のヒンズー教寺院，ミネソタ州ミネアポリス南部農村のカンボジア仏教

寺院，カリフォルニア州フリーモントのシク教神殿といった具合に，本書は全米各地の地域レベルでの各宗教コミュニティの実践を，現在に至るまでの歴史を交えつつ，数多く積み上げることによって成立している。

エックの関心を最もひきつけており，数々の事例の中心をなしているのは，「目に見える(visible)」宗教性の新たな出現の例である。さらにその「目に見える」宗教性の中でも，本書において最もよく取り上げられているのは，新たに建設されるモスク，ヒンズー教寺院，仏教寺院といった，宗教的建築物にまつわる事例である。ヒンズー教，イスラム教，仏教といった宗教の合衆国における歴史自体は決して浅いものではない。しかし，これまで彼らはごく普通のビルの一室を集会所や礼拝所に当て，取り立てて宗教的な外観を示さないなど，その姿は「目に見えない」ものであった。近年の大きな変化，「新たな宗教的アメリカ」の到来は，ひとつには，ユダヤ・キリスト教以外の宗教が，積極的に「エキゾチックな」宗教施設を建造し，自己の存在を主張しはじめたことにある。宗教的建造物が建てば，そこでは定期的に各宗教に固有の儀式が行われる。そして集まる人々は，多くが人種的特徴のために，また，彼らのまとう宗教的衣装のために目に見えて異なっている。「新たな」宗教コミュニティの存在が，多数派であるユダヤ・キリスト教伝統を持つ近隣住民に対して，しだいに目に見えるものになりつつあるのだ。

第六章で特に詳しく述べられることになるが，この目に見える差異のあらわれという近年の傾向は，それが目に見えるだけに，多数派が思い描く「アメリカ」との間に様々な軋轢を生むものとなっている。その最も極端な例は憎悪犯罪（hate crime）と呼ばれる異質な他者への反感から生まれる様々な犯罪であろう。目立つ宗教的建造物はしばしば異質さの象徴として認識され，各地で落書き，投石，放火，爆弾事件等の標的となってきた。また，1980年代後半，ニュージャージーで「Dot Busters」を自称するグループが，ヒンズー教女性が額につけるビンディ，すなわち点（dot）を攻撃対象とした人種差別事件を起こし，殺人事件に至っているなど，個人の目に見える差異を対象とした事件も起こっている。これほど極端な犯罪にはいたらなくても，2000年，シカゴ郊外のパロス・ハイツの改革派教会をムスリム団体が買い取り，そこをイスラム・センターにしようとした際，市民団体が様々な理由をつけて市に売却を差し止めさせた例があるように，地域からの締め出しが行われることもある。また，就業上の差別が生じたり，就業に至ってもヒジャーブやターバン，髭，長髪などの宗教的，民族的重要性を持った外観がその職場で受け入れられないという事態が発生したりする場合もある。その他にも祈りや安息日，宗教行事のための休暇など，その宗教の持つ固有の生活習慣が周囲の社会にとってなじみの薄いものである場合には，仕事場や学校で軋轢が生じることとなる。

宗教的な差異が様々な差別や摩擦を引き起こす原因としてエックが挙げるのは，人々の無知と偏ったマスコミ報道である。これらはステレオタイプ的な悪いイメージを形成し，人々の間に単純な恐れを引き起こすばかりだ。例えばイスラム教徒に対して向けられる，「イスラム原理主義者」「テロリスト」「聖戦」といったものがそれである。1995年，オクラホマシティのビル爆破事件の際に「中東出身と見られる人物」が犯人らしいという報道がなされた結果，まったく関係のない各地のモスクやイスラム・センターが攻撃の対象となるということがあった。その一方で，ムスリム消防士や救急病院のムスリム医師，被災者援助に対して寄付をしたムスリム団体の活躍に関しては，何の報道もなされなかったのである。

このような悲劇的な事件は枚挙の暇がないほど伝えられる。しかしエックの基本的な立場は，一貫して，これらのステレオタイプはお互いがお互いのことをもっとよく知り，漠然としたイメージとしてではなく，それぞれの顔と声を持った人間として互いを認識することによっていつかは解消されるだろう，という楽観的なものだ。しかし，理想の実現は簡単なことではない。今現在はまだ新奇なものに感じられる文化伝統を合衆国に根付かせるには，エック自身が述べているように，合衆国にとっての「我々（we)」が何を意味しているのか，という問題を再構築することが要請される。

現在語られる「多文化主義（multiculturalism)」は，それ以前に語られてきた「文化多元主義（cultural pluralism)」を超えるものとして提唱されてきた。文化多元主義は，第一次世界大戦時，ドイツ系などハイフンつきのアメリカ人たちに対して，同化圧力が強化されたことへの反発を背景に，すでに紹介した「同化論」「坩堝論」が持つアングロ・サクソン中心性への批判として登場した。しかしこれは当時としては十分に進歩的であったものの，追求されたのは私的領域での民族的多様性の維持表明のみで，公的領域はヨーロッパ白人文化の伝統による統一が自明とされたのである。今日の多文化主義は，ヨーロッパ白人以外のエスニシティ集団の自己主張と更なる多様性を視野に納めるものである。こうした動きはある人々（その中には文化多元主義者も含まれる）には，「アメリカの国民的統合が，揺さぶりをかけられている」と見えるものであり，多文化主義に反対する人も少なくはない。こうした論争からもわかるとおりだが，多様性は必ずしも賞賛とともに受け入れられるわけではない。アメリカ内部の多様性の問題は常に，統合された一つのアメリカ国家という自己意識とバランスをとることを要求されている。アメリカにおいて，多様性と統合は一つの同じ問題の裏表である。

この問題意識は直接的，間接的に叙述全体にわたって出現しているが，特に，From Many, One（多から一へ）と題された第二章と，副題に A New Multireligious America（新たな多宗教国家のアメリカ）と題された第七章において集中的に論じられている。第二章のタイトル，From Many, One は，E Pluribus Unum というラテン語（1782 年から 1956 年まで合衆国のモットーとしてコインに刻まれていた。）の英訳である。エックははっきりと，この「多から一へ」は，複数の宗教が単一の宗教になるというような，「宗教のメルティング・ポット」ではないとする。エックにとっての統一は市民的（civic）なものであって，この言葉は「宗教性のあり方と宗教的世界の複数性から生まれる，市民的としての共通の契約へのコミットメントという統一」（P. 31）を示しているのである。

宗教の多様性を維持しつつ，市民的な統合を目指そうとするエックの立場は，その多元主義（pluralism）理解にもはっきりと現れている。（なお，エックは pluralism を multireligious とほぼ同義語として扱っている)。エックはまず，多元主義が際限のない相対主義であり，特定集団へのコミットメントを否定して全てを中間色に染め上げるものだとする考え方を退ける。エックにとって，それは第一に，単なる多様性（diversity）以上ものであり，多様性への関与（engagement）を必要とするものである。第二に，それは単なる寛容（tolerance）であってはならず，それ以上のお互いの理解を必要とする。第三にそれは単なる相対主義以上のものである。そして何らかの対象へコミットメントを抱くことを否定しているのではなく，異なる対象へのコミットメントどうしが遭遇することを要請している。最後に，多元主義の過程は，終わることがなく，各世代で

継続されていくものであらねばならない。このように，エックが構想する多元主義は「無干渉主義的な無視と，個人主義とに結びついた粗野な寛容」(P. 337) であってはならず，「コミュニケーションというインフラストラクチャー」(P. 335) が要求されるものなのだ。

さて，ここでエックは議論をもう一歩進め，多元主義へ関与することは，アメリカの理念 (idea of America) への参加であるとする。エックの描き出す多元主義社会は，移民国家でありかつ民主主義国家であるアメリカ合衆国の理想状態と同一視されている。二章でなされている以上のような主張を繰り返しているのが，「合衆国においては，寛容の気風と多元主義への関与は，権威的な中央の支配によって生まれるのではなく，移民国家としての民主主義的試みによって生まれる。その国家の中では，最高の状態においては，私たちは理想と諸原則によって導かれる。」(P.335) という第七章の冒頭である。

七章においてはとくに，この理想への接近を裏付ける現在進行中の様々な事例が豊富に紹介されている。その中でも最も印象的なのは，カリフォルニア州フリーモントにおいて，敷地を接してメソジスト教会とモスクが建てられた例だろう。両団体は建設当初から協力して市との折衝に当たり，庭や駐車場など，敷地の景観に関する計画をともに進めた。敷地正面の道路には，「平和のテラス」(Peace Terrace) という平和的共存の象徴ともいえる名がつけられた。以来約 10 年，両団体は時には互いの駐車場を貸し合い便宜を図りあうなど，良好な関係を築いている。これは，「新たな宗教的アメリカ」の成功例の最たるものといえよう。

また，六章で盛んに紹介されたような，社会にとってなじみの薄い宗教団体への攻撃が逆に付近の住民との交流を深めるという結末に至った幸福な例も見過ごせない。イリノイ州ロックフォードのラオ仏教寺院がライフルや爆弾を使用した攻撃にあった際には，付近のキリスト教団体がマスメディアを通じて，率先してラオ仏教を受け入れるという姿勢を表明した。その後この仏教団体はロックフォードの異宗教交流 (interfaith) 会議に参加することになったという。お互いに大した関心を抱くこともなく様々な宗教団体が並存する状態，これはエックの理想としているところとは異なっている。憎悪犯罪は悲しむべきことであるが，それを契機としてお互いの交通が活発になり，本当の意味での多元主義に向けて新たな一歩が踏み出されることは少なくないようだ。

さらに，1991 年，下院において史上初めてムスリムのイマームがチャプレンとして祈りをささげた例，海軍においてムスリムのチャプレンが登用された例など，地域的で個人的な交流を越えた，公共領域における認知の進展も紹介されている。公的機関の方から認知が与えられる一方で，各宗教集団の側から，積極的に公共の場へと姿を現そうという試みも始まっている。そしてそれは各宗教集団からの「アメリカ」への歩みよりである。

現在，アメリカ合衆国自体が (特に数の上では) 白人プロテスタント優位の社会ではなくなりつつあり，内部での多様性という現実にどのように対処していくかが問題化している。そして本書に取り上げられた豊富な事例は何よりもまずその豊富さにおいて，この現実を如実に語っている。

だが，対話と共存によってアメリカ合衆国に明るい社会が到来する，という繰り返されるモチーフは，ひとつの美しい理想であり，成功例も積み重ねられつつあるものの，その達成は相当困難であるように思われる。エック自身が述べているように，移民の「宗教的な」差異は，「民族的」「人種的」「文化的」な差異と複雑に絡み合っている。そしてその中でも「宗教的な」差異は，他のさまざまな差異の顕著な符丁としてしばしばクローズアップされる。ここで問題となっ

ているのは，彼らが「宗教的に」異なっていることではなく，彼らが根本的に合衆国社会にとって（宗教的にも，民族的にも，文化的にも）異質な「他者」であるということだ。「他者と真の意味で共存する」という途方もなく困難な課題を乗り越えるべくエックが提示できるのは，現在存在している憎悪や反感の理由をお互いに関する無知とステレオタイプに求め，相互の交流が進むことによってそれらが解消できるとする一種の理想である。しかしそこに向かって具体的には何が成せるのかは，いまだつかみきれない問題として残り続ける。

また一方で，エックの論調にはナショナリスティックな響きを帯びた，合衆国の特殊性の新たな強調という側面を感じ取らざるを得ない。政教分離と信教の自由という合衆国の理念に同意することを規範的前提とした「新たな宗教的アメリカ」の提示は，そのままアメリカ社会の理想化へと転がり落ちていく可能性を孕んでいるようにも思われる。政教分離と信教の自由を前提とする限りにおいて，この二つの理想に同意できない教団，例えば一般社会からの分離を主張する教団や，政教分離主義へ根本的な疑問を投げかける教団に対しては，「新たな宗教的アメリカ」はいかに対処していくことができるのだろうか。この問題は国内問題であると同時に，対外問題でもあり続けるだろう。さらに，エックのような多元主義者がかならずしも合衆国の大勢を占めているわけではなく，国内において多様性が増大するに伴い，その逆ベクトルである「プロテスタントの価値によって統合されたアメリカ」を主張する声が大きくなっている現実が存在することも，忘れてはならない。

本書においては，まだまだ少数派ではありながらも着々と合衆国に根付きつつある「新たな」宗教を豊富な事例とともに紹介すること自体が，エックにとっての大きな目的のひとつであったことだろう。その目的は十分に達せられているものの，事例の大半は様々な宗教的多様性を示す出来事を，研究者であるエックの視点から集積したものである。評者が何度も強調したとおり，その豊富さそのものが本書の著しい特徴で意義であるのだろうが，逆に一つ一つの事例を，宗教的実践の当事者の声を交えて深く掘り下げる作業は当初から放棄されているとも言える。アメリカにおける宗教多元性により接近するためには，本書で示された「新たな宗教的アメリカ」の理想を一方におきつつ，またもう一方で，よりミクロなレベルで進行する衝突と和解を明らかにしていく必要がある。

本書は 2001 年に刊行されており，おそらく原稿の大半は 9.11 発生以前に用意されたものと思われる。ただし，本書のペーパーバック版にはハードカバー版には存在しなかった「前書き：9.11 後」が挿入されている。前書きにおけるエックの論調は基本的には変化していない。9.11 直後に噴出した，様々な外国人恐怖症（xenophobia）（イスラム教徒や，ビン・ラディンを思わせる髭を生やしたシク教徒が特に対象となった），それに対して活発になった異宗教交流と，「アメリカ」としての統一の強調を語った後，エックは宗教の相互理解が世界全体に及ぶことを願って論を閉じている。理想の実現の前には果てしない困難があるだろうが，それを知りつつ理想を論じ続けるエックの姿勢は評価したい。